

学生諸君に「立教」を講義して

寺崎 昌男

はじめに

学生諸君は立教大学ないし立教学院というものをどの位知っているだろうか？ かねて、漠然と疑問を持っていた。

1997年度前期の総合A「現代の思想状況」の中で「大学論を読む」と題した講義を担当し、全カリの一端を担うことになったのだが、授業を進めていく途中であらためてこの疑問を感じ、2時間をかけて「立教大学を考える」というテーマの講義を試みた。後期に、文学部準共通科目「現代社会講義」のなかの一科目として「科学・大学・教養・人間」（聴講生約60人）という科目を担当した中でも、今度は3時間をかけて、もう一度このテーマで講義を試みた。二つの経験を整理し、学生諸君の声を紹介しながら筆者なりに考えたところを記してみたい。

最初に結果を記しておく。

1) 学士教育課程段階の学生諸君は、驚くほど立教（立教大学および立教学院の双方を含む。以下同じ）について知らない。

2) しかし、講義のあとでは、一定

部分の学生諸君は、改めて立教について強い関心を持つようになる。

3) 多くの諸君が、このようなテーマの講義が行われることを歓迎してくれ、今後も何らかの形でこうした機会があることを期待するもののように思われる。

二つの科目のうち、全カリ科目「大学論を読む」を仮にA、文学部準共通科目をBと名づけておこう。

着想のきっかけ

立教に関する講義をしてみようと思ったのはAの4時間目であった。

もともとAは「大学論を読む」というテーマになっており、わたくしとしては、受講生が30人以下の場合は演習の形で運営し「『私にとっての大学』といったところから始めて、現在の主な大学論を共通に読んでいく」と履修要項には書いた。しかし開講してみると、平均45名ほどの受講者で、とても演習方式でできる人数ではないことが判ったので講義式に切り替え「現代日本の大学論や[大学]批判の検討を手始めに、大学論の諸タイプと歴史を講義する」と記した通りに、進めていく

ことにした。

「立教大学論」までの3時間の講義内容を小見出し風に記せば下のようになる。担当者としてのねらいは、「大学のあり方を原理と歴史の両面からあくまで現在の問題として考えていく」という方針であったから、「大学論」といっても、近世哲学者による古典的大学論を紹介するといったことを考えていたわけではなかった。

第一時間目 序論

今、日本の大学はどのような問題に直面しているか

どのように変革されればよいか
今年の前半期のテーマ

第二時間目 新制大学論（一）

現在の大学はどのようにしてきたか

明治以後日本が作ってきた大学制度

現在の大学を生んだ戦後教育改革と大学改革

アメリカ対日教育使節団が示した現代大学像

第三時間目 新制大学論（二）

一般教育と専門教育

高度経済成長と大学の大衆化

第一時間目の「改革問題」との関連

わたくしは、この時間に限らず教職科目でも時間ごとに必ず出席カードの提出を求める。そして、講義への意見や感想があれば、出席カードの裏に書いてもらうことにしている。

第三時間目までのその反応を読むう

ちに判ったのは、大学「論」を講ずる前に必要なのは、学生諸君との間に共通の事実認識（知識）を持っておくことだ、ということであった。このとき閃いたのは「そうだ、立教のことをテーマにして話せば関心を引き起こすことができるかもしれない」ということであった。始めから予定していたわけではない。出席カード裏の意見をはじめ、学生諸君の表情を見ているうちに浮かんだアイデアであった。

四時間目と五時間目は、次のように組み立ててみた。

四時間目 立教大学を考える（1）

わたくし（講義者）と立教

立教学院の起こり

明治・大正・昭和期の立教の発展

事件と、それに現れた立教の「体質」の特徴

他のミッション系私学との比較
戦後改革の中での立教学院

五時間目 立教大学を考える（2）

「大学紛争」と立教大学

70年代以後の立教大学の改革

現在の改革動向

この二回の講義にも、他の時間と同様、いくつかの資料を用意した。

第四時間目に用意したのは、昨年出たばかりの『立教学院百二十五年史資料集第一巻』から作った資料抜粋である。タッカー総理による大学設立趣意書、敗戦直後における立教学院幹部の学園追放に関するマッカーサー指令などを纏めた資料を準備した。

第五時間目には、1970年代初めに『朝日ジャーナル』誌が連載した一連の学園ルポ「三百万人の大学」のなかの中島誠氏執筆の「立教大学」篇（「着実に歩を進める大学改革」，1980年5月16日号）を全文用意して前時間に配っておき、それをもとに講義した。

講義の要点

それぞれの時間、何を語ったかを詳細に記す余裕はない。要点だけを書こう。

第四時間目には、

(1) 築地の小塾から始まった聖公会立の立教学校が、いくつかの変遷を遂げた後、専門学校、大学への歩みをたどり、戦時下の再編や理専の設立などを経て戦後の新制大学になった過程を概観した後、

(2) 特に二つの事件、すなわち明治32年の訓令12号事件および戦争への対応の実況、の二つに重点を置いて詳述した。

(3) そのなかで、同志社・明治学院・青山学院等のミッション系私学と異なる特徴は何だったか、私立大学としての位置を確保した過程の特徴、そして戦時中の留学生受入、文学部閉鎖・理専設置などに現れた戦争屈服の歩みなどを見て、

(4) 私の理解する聖公会と大学・学校経営の特質などを語って締めくくった。

第五時間目には、

(1) 戦後の大学への転換の様子を、

国立も含めた戦後大学改革の流れのもとで見たあと、

(2) 大学紛争期の様子を簡単に語り、

(3) 朝日ジャーナルのルポが取り上げた「法学部社会人入試」と「文学部文B入試」との意義や反響について詳しく語る一方、

(4) その数年前に立教に起きた「大場事件」についても隠すところなく語った。その上で、伝統と新しい大学課題に即して、なぜ全カリが生まれたかを説いて終わりとした。

なおBでは、今度は意識して準備に当たり、講義のほぼ同じ時期（10月中旬から下旬）に計3回の講義を行なった。

上記の2時間分を更に詳しくして3時間目の半ばまでに延ばし、特に文学部共通講義であることを考慮して『文学部資料集』に基づきながら、立教及び全大学の「紛争」の事実経過や歴史的意味などについても語り、加えて、以後25年間の学部カリキュラム改革とその理念を説明し、大学における教師と学生との関係、教授会と学生集団との関わり、私の理解する立教の特色とその歴史的考察に及んでみた。

講義の中で特に大きな便益を感じたのは、先に挙げた『立教学院百二十五年史』の資料篇が出ていたことである。配布資料でも最も正確なものを用意することができたし、またわたくしがその中の「大学昇格への道」「進学案内書・受験雑誌に見る立教学院」を担当していたこともあって、戦前の立教の

学風や空気等を伝えることができた。

学生諸君の感想

こうした立教大学への「総括」や展望がどれほどの一般的妥当性を持つものか、最終的な自信はない。だが学生諸君の一部から寄せられた反応は、考えていたよりはるかに積極的だった。以下一部を紹介しておこう（末尾のA、Bはクラス別）。

「一年間（この学生はA、Bを続けて聴講した）先生の授業を通して私は立教生であることを誇りに思えるようになったのと同時に、私が立教に対し貢献できることもあるんだと気づかされました」（B、英米文、2年）。

「ただ過ごしている〈大学〉が何度も改革され、またいろいろな先生方によって発展していこうとしているのを3年生になって分かりました。他大学の人と接すると立教がとても穏やかでのんびりした大学であるのを感じ、この雰囲気は私は好きです」（B、心理、3年）。

「ミッション系大学とひとまとまりに考えていましたが、教派によっていろいろと考え方が違うことが分かりました。今日ではどこのミッション系大学でも信仰するかしらないかは自由だと思っていたのですが、どこか強要している大学というのはあるのでしょうか？ また過去受験資格にキリスト教信者というのがあったことはあるのでしょうか？」（A、英米文、2年）。

「立教の原点が少し分かった気がしま

した。昔の立教の英語教育が評価されていたなんて驚きです。『今の』立教大学論も聞きたいです。』（A、産関、4年）。

「立教は明学、青学としばしば同種の大学と考えられることがあるけれども、実は、大学の設立において、またその後も訓令12号事件への対応の違いなどさまざまな話があったのだと今日知り、すごく驚いた。今日は自分の知っている大学について他の人が余り知らないようなことを学べて、何か誇らしい気分になった」（A、法・国比、2年）。

「どうしても好きになれなかった立教大学の良さを知ることができ、『この大学に入学できて良かった』と思えるようになったのも、この授業の影響が大きい。私は今年で卒業する人間だが、卒業する前に母校の良さを発見できて感謝している」（B、文、日文、4年）。

「この半年に渡る授業を聴いて、“教える側”についても理解が深まったように思う。そして何よりも、学生側からは見えにくい、近いようで遠い存在になってしまっていた『立教大学』について学べたことは、私にとって大変意義深いことであつたし、学生としての自分の学び方にも非常にプラスになったと思っている」（B、文、英米文、2年）。

同種の意見が多くある。要するに、学生諸君は、立教に関する拙講に意外なほど強い印象を受け、また新しい疑問も引き起こされたものようである。

Aの終わりに、私はかなり詳しい授

業評価を求めた。

詳細を記す余裕はないが、講義で取上げた六つのトピックのうち、興味のあったもの上位二つを上げてもらったところ、「立教論」は第二位の票を集めた。そして、講義全体の評価では、「大学論を読む」といったテーマの大学・学問・教養を考える講義が総合科目で今後も継続することを「強く望む」あるいは「望む」と書いた者の数は、100%に上った。レポートでは数人の学生が立教大学について調べ、論じた。

小さな結論

性急な結論は出せないが、三つのことをつけ加えておこう。

第一に、わたくしの印象では、立教に関する知識（情報）への興味（誇張をおそれずに言えば「飢え」）は、知的好奇心というよりは「自分の居場所を確かめたい」という欲求に根ざしているように見える。立教はまさに物理的・心理的両様の意味で彼らの「居場所」である。ところがその居場所について、彼らはいかほどのことを知っているわけではない。塾や高校の受験情報・進路指導も教えてくれなければ、親も教えてくれたわけではない。入学時の総長やチャブレンの講話では、確かに立教の歩みや特色が語られる。ただそれは批判的・分析的視点を含んだ講義ではない。どこかで「立教を知る」、それも大学にふさわしく「批判的・学問的に知る」機会が設けられる

必要がある。時間があれば、小グループ討論のような機会を作って見たかった。もっといろいろな反応が聞けたに違いない。

第二に、このテーマに入る前「君たちのなかのある人たちは『不本意入学者』かもしれないが、とにかく立教とはどういうところか話してみたい」といった。彼らの表情に、それまで感じたことのない揺らぎが走った。

わたくしに言わせれば、例外少数の大学・学生を除き、日本の圧倒的多数の大学や学部は、累々たる「不本意入学者」たちを抱えている。彼らとその「不本意感」を克服できるのは、ほぼ1年後だという調査もある。

その克服が単なる「あきらめ」や「馴染み」というレベルにとどまるか、それとも自分の居場所たる大学そのものへの知識に基づくかは、大学教育にとって小さな問題であるとは思えない。「知っているようで本当は知らない立教」。このことを学生諸君に感じてもらったとすれば、講義は半ば成功したのではないだろうか。

第三に、定年直前の教員としてはおこがましいが、提案一つ。全カリ総合Bあたりに、折を見て「立教を考える」といった科目を置いて見ることはできないだろうか。

各学部の教員、職員、チャブレンも分担され、それこそ制度的沿革、学問史、問題史、事件史、さらに更に各分野のディシプリンから見た批判的立教論を語り、討論する。他大学との比較

が必ず学生の興味を呼ぶことも、今年分ったことである。また卒業生、社会人、企業家、ジャーナリストを呼ぶ、といったこともおもしろい。わたくしの小さな経験から見て、必ずある数の聴講希望者はいらる。

このテーマは、一人でやるのは重過ぎる。そして2～3時間でやるのはもったいない。そう思うようになった。

(てらさき まさお 本学文学部学校・社会教育講座教授)